柳園家集

番外書册

和歌雜

内閣文庫
和書
類 二五五三五
號
冊 二
函 二〇
架 一

内閣文庫
番號 和 25535
冊數 2 (2)
函號 201 678

国立公文書館
National Archives of Japan

柳園家集下

雜之部

遠山雲

一むらの雲ふかくかくれてわたるかの山はやちふなるらし海

紀伊山路より岩代浦雲やよそまの雨のなごりなるらし海

海

うねうねとたちくる波の白雲のやへかさなる山ちかくなる

名所海

遥々と霧こめる波の彼方の山其外上の雲ぞかくれて

永井晩望

いつはまふ春すぎぬるかほのるこ孫の松原

河の水流清

かく計ふかき谷河の乃底のさし乃へそみゆる春

海

あまふ春今や浦さるかつるん沖つ白波さく寄きぬ

海辺晩望

海人のやくもしほの烟をたて嵐ふ成ぬ孫はまつ原

海眺望

沖つ舟漕さてやうくむとそ乃そしとまはるみ乃れ

行旅橋

かつりて見ひわ乃なあやうき橋いそてるけん谷のけ橋

閑居

世とそ乃ふ人いきまの有はい松の嵐和友ひなりぬる

山家

山住や見の水はしの一筋ふ松ふる世ま乃安ら乃

山家雪嵐

けふも亦夕山ふるるたるきぬ乃ふの松とたるむ計ふ

山家送年

雲とはる山ふ下ひはさひきの乃れを乃て年ふへみる

谷の水はの嵐を雪乃はて耳ふはつ乃年を乃へみる

池上松久

池の岸よりなるべし松そなへて久よかるのこゆん

松影映池

あをさを住へき池のれなしに松をかたをや風の初むる

松ふる知年

なして住たにこそ志ゆ立る緑式尾上のたてる松のよこひ

竹不改色

いつみてもかはらぬ色に秋ちすれ志るしけ

つ志

いつはふ松つゝ年成ぬらん老あをきゆるさりける

うつみ

京あつて人とあはぬを待あんかこの新るこゆる雨を

茶

宇治山のこれめをにるふ志つそしぬ時こもれむるを月のむる

旅宿嵐

嵐吹山下陰ふやるよいとけて夢越をすまさりけり

旅中夢

七日も又同山ちとなるきてさむれ夢ふこゝろ

旅泊風

吹のるよりの船ひてふ湊舟こまりもの(ほはやあらん

弘前君のこゑはなむけによろこひて峯原
君か世は末ひろき扇の名のかへりきまさは千代もかはらて
陸奥子か越後の國へ行けるに
しらぬ雲のみちに遠き不二のねを君かあふかとみつゝ思はん
妙玄高義門法師か家人の小濱へ帰らんとて
するときゝしとゝまるへきにもあらしなといひて
契りしわかれ又もあふみんおもふ別と帰るさなき習ひ
播磨國曽根村社司陸奥守直継か家人へ
かへらんとするおりにおくりけるとて
家にても思ひ立へき六月に那越山越行かん

伊豫國松山人石井義人よりせうそこおこ
せけるこの便りをきさらきりかれを又のへより
に玉つさ行のふところにはひりしをたは
つかなくてむくるところのれと有るこの人し
忘れぬを君やわれも思ふらんと書てとうねにまま
富士
けぬか上にかくれしてかよりて神よりやへてはなりぬ不二の白雪
名不神社
千早振神のまへの榊葉三月れ白ゆふかけぬよ不忘しれしさき
冬神社

哀れとかなしかるべき様なる事なや神の心なるらん

西懐

世の中を何にたとへてながめばか海にうかべる浮橋

世を捨て山にはいれど人毎に思ふ心の浅からぬかな

家居西懐

ちりにまじる何のとがもなかりしを世をうらみてぞ

家を出懐 四月廿二日 人六百五十四忌

頭ぬくといひし人の言はれをむの陰にて思ふ春の夢

本庄道貫君伏見にたづねられしに

ともしびをかかげる中に母君の七ときの

思ふあまりかなしきを思ひ出

なくなく堀をしたしみのおれとやいはるれ

ありなるかなこのつなでをまきてる

はるを思ひ出し昔の夕雲や花のまぶのわかちる花

福島行途二月の朝日みまりあるよりまなこ

より涙をはらはらとこぼしけるをとがめ

けるをとがめ

堀をうきて後をこぼしけれあまり思へば家なれの中

三月廿七日あしの國の只人沈水暗時にまか

りけるより告知をうけて

あるにて別れし人のかきはつ面新たるこゝろのあるか
青木義憲ぬのとよりせるきのはもちゆあま
れる男れ子うゝなくるよりいもてうれるれ
たほうる世ふもさもたくちゝこのるれこゝかか
なゝかりけれといひおこをけるおれたゝ
かもてまなる幸和をうゝなひゝうとれを
ゆもひ出られていとかちるさみ
身はつめハ君ゝ上こゝ世ゝ今れさくいのふ夢ゝの中
母ちいまをゝよりゝ人幸和ゝをうゝりて
いとかちゝきゝゝふ三ゝまひゝを此年ゝ公了

出つゝまつゝ年いと若くてなり出る度毎
にあれ世ふいまをゝこのそゝなるのゝ
ちゝハたゆる末なゝ志のひつをことし
五月五日幸和十九年こまのゝしかを後
乃ゝかこのもくゝまもあゝゝけ神世自
十九日けゝ志はけやゝ十七四ゝあゝ刈
たまくれを香たき花をゝなをすきて
きみまさゝまをゝそハ見ゝかなき嬢ゝき年もゝゝり
ある人なきちくはゝれゝとゝあゝあ
てうゝあこひけゝるゝ

まのをふ数ゆくるゑにたゝ行きめぐりて飛こなまし

村田芽枝尼こまうけるころ

をゝとりつゝそしまるゝ

ゑにをゝありしの飛ふてなきくらん雁は此しき

村井国ゆく身まうけるころ

をとゝいひつゝそしまるゝ

いつはらん雁ゆく飛不たゝ多ゝ今も見ぬを

たなり人の墓ふまうてむたゝ月日とて

君はけさもゝとゝ松はやきみ高神をぬして

たなり人の一周忌

めつらる月日をたゝ月日まて人と昔となるかゝしき

ゆくゝうれしる

彩霞なる松のあとはあやきい心のちゝ拝こけと

朝日かやきたる元る祝の登れるところ

雲なとはるをこしはそ松れゝるとはるぬあぬこゝり

元ふ常能をきゝたるゝ

なのいゝはるゝ元ゝ雲をはをおれはやゝふゆなるゝれ

古松のこゝ

毋やゝしちるやさん主ねゝ年はるゝ八ふゝ石ゝる

紀貫橋をたたまくるこゝ

高砂むさぶれ梅の風さき世さ〻かをるぬるゝな
老木梅乃〻
はけむて来ぬる木の梅乃花ゆきぬ梅の匂ひ
保野乃〻
秋の野いろ毎ゝ匂へ深き色てひとつなりけり
一ふのうたる人秋の野を尋く
秋の詩ちゝ人かゝ紅きを花の波を道を〻てく
ちゝへる麻の〻てるゝ
むすきなるあゝ花て梅麻のまゝふ深秋深し紀
秋の深ゝ野乃深ゝ
秋深ゝ成ぬる
落葉ちゝ〻ちゝる不
つゝかつゝみつゝる紅葉ゝ秋のゝこを深ゝ成ぬる
女ゝ紅葉ひろ〻ゝる不
多ゝたゝ明ゝ〻き武山風のさゝ〻紅葉の限ゝけ生
すゝ田川行のあゝ
隅田川行のあゝ枯て月新ゝ来ゝけゝる
十二月人行て梅ちゝる
ゝゝ山ゝゝゝ谷ゝゝゝ梅はゝゝゝの〻ゝき
秋深ゝ金色はゝちゝる不

水無月はじめの日をよそふすむ魚の涼きんこそはるる秋

職人長谷川師の矢作るを

よそめ見ハすなる志のもまりけんかくはたむくりける

松女

よの中はうきをふあひて志つむこそたかれあと名付そあ[illegible]

紀朝臣

歌はは海とよの心のひとことを形なり形元ちをー色た

松久友

いつこてもかくぬるの松をそちよ友とハつくへくりけき

對松年齢

昭和元年しふ月を彩湯なる松も友とわれをみる夜

西石屋宗年

世とをふ流て山河のそのはなれて世へぬる年

吳羽の山の岩はの岩はなれとをふ人のれき

春祝

まのくよはるふ松のちよ千代元ちよ[illegible]の数ふ引そや

月子祝

山のハ代松より出る月新やちすかたぬ光なるむ

多々祝

元ふ代をし井の蒲の友をるとをちとを松元夜

雪梅祝

いく春かゝて匂へ梅のたゝる年毎折てかさゝむ

雪鶴祝

けふ雨ふちをゆつるの形はやゝ雪ふ世にわたる

雪亀祝

万代をふのまふ行ぬゝさゝ波のたゝひの示ゝこゝまを

旋頭歌

鶯

鶯乃初こゑなり雪の梅ゝうめ柳
いつしなるゝむ柳ゝ梅ゝ
このもとめて日とよさ彩さき彩ゝ雪梅の花
ちりぬんのちきなけ雪
咲くして日毎さたの庭の雪を柳ゝ
梅さうつりてなるぬ日をし
花

いさゝ雪をひさゝこゝ山ゝあそん花雪

みつけみつて山路あそいて

依也待友

はるゝひとゝとはねをあの梅を我ひとり
あそれといひてくゝ川

静見也

志のはらの池乃上はもの志ら雲ふこれを
さゝりなりぬ也はれゝら雲

志柳乃えをまうゝる春の日をもみつ
あそふとうしゝ志れらの日乎

海金志月

けひのあまとよりとてやあまの出くほのゝと
かすむ月よりかちの志ほる

山路雑

初ゝひおたりろき志の山ちるはすさく
志たゝなきぬ志れ山ちゝ

言志ゝ郭公

あとゝ文ゝ帰て志るハ夢あゝぬ弥生山
ま里もちりてほとゝなくゝ

谷鶯

たきゝる志ハすれも美楽志ゝて谷底ふ

ありとをしたがすまたこる人
いくへとわかぬ若葉のかげとなりふき谷川の
しら波きこえもたきこそ
ゑれるきを彩畑もこがすふき谷の下露松の
ちるこの葉の伝よかくまて

うつす

もちてわかはみなりぬ夏の山こしほとまた
帰もやまるとまてる沖の

垣卯也

雪とこそ月とまてへい垣のうれもこつをかを
もとをみまこのたのうれはな

藤蔭卯也

月かよりしらしといひて庭のうれもくれはてを
人まやこをもしあのうれまを

待郭公

郭公一声なけや更ぬるまて夕月は
入はてぬまてまてふ

郭公今やとこゆるくもはまうれ雲乃
ゆふへのくてる月を白雲

待客中郭公

郭公遠ふきつとまてやかくれ待人た
まる山ふとはもひしらにて

樗 雅亮

あくちのもをのそもをちれるやらふ紫の
雲にはかくしはしのやの彩場ふ

曳菖蒲

あやめ草ひくそ沼のあやかりぬ袖のたちて
ぬるもそはかをりぬ

き枝 移河

大ゐ川う和のかりきなりまき四日はよた
まくをやはたんこのもかのをて

陰下 岩

蔭ふもちたよつきをふ岩これて岩ゆたを
涼しくををこのほるこまれて

月上夏月

けてきふ夕すしき庭のいたこふいつかと
月こそやとし庭のいたこて

深山泉

山深くなりぬるまて松の嵐岩つふ
はをもさむきいちこそすし

秋風涼

ふる川岩まくらとほすたまちゆく水夕されを
いとゝ涼したまちゆくこゝは

草花先秋

八重葎の宿の草秋あるめとゝしな
夏はまつをなるらんを

草花

をすきまねくかゝれはまはきるゝ家ゝて
衣をぬきてゝ涼しくまるけり

月

秋乃月をなりとゝいふ月をこぬ人月こ社を
たちまちふゝぬあるぬそはまふ
山はいふいまこそ月乃ゝをほめて今の初
彩霞の松乃ゝれまりこん

月宿松

神つ波立はゝれて月はいてぬる濱まの
松のゝはまゝかゝの宿ゝ久ま

松間月

やこなゝし岩はゝ松ゝこはまあゝぬゆゝに
月さゝ出てゝゝのまあゝぬ

月あり

雲晴て月よりこたつ屋の一つゝおれくゝを
くゝとやみすから月一つゝ

百才麻

ちらくれを屋ゝる麻のおもきゆる村雨れ
不るをまゝとつまやまふけん

孫石葉

いそふりけよるいそをの孫はもみちいそをいさ
孫ふ舟よをいそよおりゝ年

時雨

ちるゝか山路の夕日清あくぬを一むれ
雲ゝ松なれけゝ孫のまゝ原

行路時雨

むゝれはきまを松の陰やゝれほんゝるゝから七原
山路のまゝを日ゝのけさ晴ぬ

十月石葉

あま小舟はつきの山代岑のもみちはをされを
こかきをれまゝるゝれわのゝとゝち葉

石葉枝枝

かつゝをはるゝうれ一庭のゝゝちは木枯乃

をやむまもなく吹きふきしを

寒菊

霜さえわたりぬるの夜明方白ひてを菊乃
さけるもあたれ知日まほひて

寒松

木枯ハふけとふけとまたく至とも色ふかし
つるしと松いろのつねなる
ひさきハとゝまきハふ松の葉ハ雪にも
あへとゝあへといろもかはらて

海を月

海人のすむ磯のとまやの比さしまろ月ハ
ふなゝゝとゝふ月ハてりあ

千鳥

明石のうせとむかりて後る千鳥なるまに
舟すりをちるあ川なりぬる

富士家家

白雪のふりはへきる友ふ時き法とを丁
いさゝをのみて見ひてかゝん

社頭雪

神垣のさゝ木もたまふふしる白雪たすゝ乃と

このみわうちをれふせるを

閑居雪

よはけてつもりふつれば庭の白雪ふみ分て
とひくる人をあるぬ宿哉

雪与霜深

年くれぬくれぬと花ひすがたをまふ白雪を
よるのうちふくはきかぜ冬いなりぬる

冬旅

いさゝかもいそをすてゆくくれぬるまふ冬の日れ
宿はてぬまふくれぬをまて了

向炉火

炉火てさむのひねて見る友とちかきつし
かくもたのくるを夜毎了

梅

梅の匂やくほころひて匂ひそめるきかそふれを
まを雪とはきこ庭のこのきねふ

山家嵐

軒乃雲時ぬとこれを峯は松原いつこの秋
あしてて雲ぬこをはまつ原

雪山雲

夕まくれの入るきこえ枯すゝきも枯果て
ものとこそかくを山のけみち

沖を帆

たゝ帆上てとみ出を沖の波まを泡こそ
ほのゝふなりぬ沖の波まを

荒ふれ景

いつれまふかくなりゆくもゝ思ふものと一日まを
なくひなくしてたゝハすゝ浪

今様

正春

をつゝ落れねをこゝわきをいまゝ実をも
ゝ言のかをとみれうちあゝれを
をみさ川原ハ風をゝ

年内正梅

うめはさけるハまをのうゝ言のけきふ
はるをゝぬゝとゝくをれやうひすの
たまりいてきなるあゝを
柳は芽れこのゝ

柳の枝にうちとけてはく
はるきぬきてかきねの梅もほ
のぐるかとこそ見えけれ

静のぐ梅すぐるこの
志はのをまきくるかゝ昔を今に
うつしひろめてよのさまをこそ
おもひやることあるべきなり

ぬばたまの梅のそでにきぬ
なのむれをえだにかきふせきはふもいまは咲ぬを
はる風はたゝやとのさきひきぬらん

河竜

咲川ゝ川の辺のさくら咲みれば
ゆくゝふ舟こそこれ多くて人こそつどへ
みれ人ゝ舟ばしをとこ
咲まさくはるみの梅なる色つゝ
かゝゆふあ[illegible]

花慶

ゝ

梓弓やよひの桜もうつろふと春もたけぬれバ
花を山をたつねて春を山ゆけバ雲さへまよひて
野へ出ても雲とみるまでたゞ一日うつれバほとに
の花山花も咲みたりての結さへわかるゝまて
山辺ゆき野へゆき花をたつね遊ぶ
天保十とせやよひバかりやよひの末つかたまで
てあしくてこそふよるも花もや盛なるよしい
庵を道行人のあしたときくまゝはした
しくてよめる長うたみじかうた
長閑なる春日のさし人のよもすがらおもひ立ぬる

長歌

春到管絃中

やよあらぬ春ハきつゝぬやよハ鶯のなれやた時
にのどきハ和やぬるまんかきなす玉琴これなる
ふたたびに笛ふきねふ山の林と山のけしきも
にぎるねと河のそらもおのつからひきいけれ
長閑なる春の末の花のもり

春鶯囀

鶯乃聲ハ既ふ有り甚谷乃陽をしめて
つくりたる春の跡にさたのしさハ春ちまち初ふ

ちるを乃答ふり出て　梅ほの初霞の梅ふ
ゆとゆく夕とゝの花　咲ゝより日毎ゝ毎ゝを
きゝ川ゝいひ待つて　都人はるゝ〳〵しく
年毎ゝ来ゝ来ゝいへを　初雪花ゝにと

反言

雪の雨を陽の宿し如と　春ふ好ゝ人ゝとゝ花川

依風知梅

あつまをたはるゝ沢の　雪ゝのねゝを来ゝぬ
老ゝ身をあるぬとつくる　かゝるゝをかねてね笑て
いつしゝと来ゝむを待ふ　明ゝ方ゝ帰てわゝれを

ゆふるのあゝをの山乃　やまけゝ時日ゝ人ゝを
方さゝぬとみてやめゝん　行ゝの隅田川原乃
さゝゝを堤ゆきゝのひ　ゝのとやみつ越ゝ林
しか半人をゝれしを　一とをゝまれゝとまれの
うゝ花を花春のやよひの　いとゝくをゝとゝ咲き
世ゝ人の毛付日数を　ゆゝ花ゝゝよねて一言をハ
うゝてふ面新うかひ　ひまゝゝめを芽ゝ拾ゝゆる
いとのりを糸いゝまの　ゝまゝ松ゝゝもりてわゝみゆゝの
いをのゝと花ちりて　ゝ枝あゝゝ若葉やけゝむ
うたてゝの病乃やつて　ゝ彩ゝも毛をゝをぬハ

仏のあらはれたる

反哥

むをはたはるしくてをそ咲はる帰ねも耳ふ〳〵ぬなりけり

春海

神みきを高わらりぬ五つみしを白波よをく

あさみより高をわてきぬこの〳〵てる夕乃

入日さん〳〵浦ずりをちふあ引する法士のを舟

つりたく あまの舟いろけまふ高ろひつ

波のまふ 夕日かゞろひやく了神ずりて

又ふたなりけり

反哥

波のうへのつらふふ仁あまふ舟又いとひる所れてをの

夫興

はるの野ハ道はゆきぬ右ひをりすれむさき

初わらひおひまりけりすれるはまんとすれを

行ちきふ雲雀帰ちはつるひをくんすれを

こゝあふ咲るれきておす袖を吟すしかゝみ

道はゆれぬ

咲る花咲

梅さくらゝゝよ〳〵花塚の葉ゝれるきゝあ新咲

時日の長きまつ咲初の梅の枝ゆきつなぎ我
あれそめし梅もちるをいまさはや梅とちりぬ
雪のやうにひすがれるこゑひるねの
いまだ冬の谷へなる行雁を聞くまとる

首夏風

初夏ふきめぐるまこと涼時をつけこのそるまと心
ぞ乃こゝ宮もあめぬ三月山も咲去涼と
もあて一つゝ風を友もて去るあ人を
ふきわるる色ゝ源みめぐりゝ待ぞむと

おもうをあらはす

反哥

吹風やつる時ゝとおのみうん芳葉かる人乃心乎

遠郭公時鳥

あゝ山のとゝ去のへりけるきぬぞゝ山ゝ時日
ゆりふゝもち花ちるみを去ちて出ゝも時日
雪乃うめのほたえるけつ都を好きも時日
梅もとゝ桜咲川去好のゝふるゝも時日
るなを色て野乃山川たゝしゝあゝれ時るを
ほゝゝ文す都きゝかゝたそさゝ雲まもみゝ純

おもふ人もちゐ又まもりをきて侍るれをわすれぬ
おりれへてこゝろとゝまるなりぬ雅藤山藤を

桜花

ゆきのうちに侍るゝ梅はつゝまて白ひさらに
おそゝとゝ色こそ侍されいつゝと二月やよひ
はるの色れさきの雪をゆめのゝ色あとなくて
みを枝さゝわるゝ月ぬ梅さ九ら初るつるもりぬ
あゝはこのこゝ

反古

梅梅ちりてゝうゝ成ぬらん兵衛かれ見ひさゝ張ひぬ

卯花

ゆきのまゝ雪ハあやさき梅ハ時ハ春をこゝ
やゝれよゝ月をてゝ春を梅の雪を垣ハ半はき
はゝの月をなををてゝ春ハあやゝよゝあやゝ春ハ
かきのうれも

遠浦待郭公

むゝさゝめの春ゝ春ゝ月のけれ清きゝ
よゝ春のゝなきゝあゝてよゝれゝ暁やなゝく
かゝ斗まりなゝ梅の春ほゝまゝ春のゝ月ゝ
むゝさゝあのゝ春ほゝよゝて月のけのさやゝをあゝ

よはまねまちて心そらまちし時

寺山郭公

しら雲のうきてる山乃なか山乃寺堂の山守
此あさけ はるもふこえをきくらむかな
あら〳〵支すまりなるあまてひ明くとすれと
なく聲はきこえぬハ

雨後郭公

おひしける若葉かくれてあるとふわぬ半乃
人をまぬこはみあれそ卯花乃咲まあくぬ了
たそはちく〳〵ちらもあくぬふ所ほ〳〵すたをきれた

きのひくる了

早苗

ほ〳〵支すき宿さ月乃はこうれの雲まみにそあ
あさ日乃けに田つくるさをそめたるく嘆とわ思ふ
をちこちふ苗をはこうをゆひやとひおのれたまなひ
あをこをふつねたくれそ志をとあとをとこ
をとあらハ志ををとをとを高うこれ志をの小笠き
ま物れてきはひおう於たみかの了

霖五月雨

くく〳〵のはれきぬ雲ふるまてのうる五月雨哉

あ一門の山下たる月岩ずみの春さき所可
とろきてこなるけちまきゆるたそろ
反哥
八重とたる山のあまき雲いろ時ていの名月新八みるへ家
旅毎五月雨
むやひて日ひ一ゑをいさけふをはれはれをを
はなてとき毎出をまゆ空きき帆あそ湊ハたれ多
おひの見ハいよく吹ぬ時られて雲はれ初ぬ
そふ一こ松ふるまりて毎ハやりてめ
岩

松ハよ岩岩ゑあくぬ了をちこちのこのきのまこ壱
おひ一けるあはけはくれひとつこ石ふふくあ八
時乃ま八くれ行まに河をこれ岩ゑけきを
里れるのおくれ先ちちちきほひまほひ出きて
空北ちふ岩をかるおをはちはちちちまる持
いるみくれ九おあるあ八河辺侍北了
秋遊夜月
みれ月乃四日をさくあ山の沉景をるを
おのふちちあをくまをを春川侍きこのちの
をなるみの堤乃のくれ春ひの六りおのまふ

やゝくもりあるそれ初て彼の原の中なる月の
かげの深き

夏歌

久方の月の都を出てなを隅田川原の秋風ぞふく

夏題

京雨乃はるゝよもすがらなるなつの八れを下かゝ乃
かけをよみむりひろそこゝふゝくところ乃ゆと
ほゝゝゝくゝくよひつゝくゝまの夕まをなれを
これ月の照日のをゝりたる沓ゝられけれ川
秋ゝうをれ出の比ゝ下ゝ次ゝ行なまを

夏雨

なれのゝゝゝゝ計ゝ原ゝきを待ゝ風の涼ぬまふなき

納涼夏

水ひゝゝる水の流乃ひゝゝ森を待ふゝ清水
樹の陰乃ゝゝけゝる者ゝ御ゝゝさゝし行者
あゝゝれゝ原ゝくゝゝゝゝ水の末張ゝ

立秋

よもきふいつとはなしに秋のくるゝ夕ゝよ
なとてかくさしのゝしんにほる出ぬまきれ落
はなかの苔ゝのゝ秋のみるさとふ袁はまき新
秋乃くるより

金韻忽生殘暑盡

京やとの軒乃下萩うちはらふ文はきたてしを
秋のゝ色はいつの秋る風そ土はらてゝ照度ぬる
とは月乃暑のはとて時のまにはわ消ぬて
吹とあくぬ了

感思在秋天

時ぬまをいつもみなをなとてかく同しみなりは
宇のをは秋とはいてをオコてさしかるむ
みるのふ思しのるむ京とはふ
きゝ雲のなしをとをとはるの乃るふとてを
空もはまを深おちりあやしとあやしきはを
秋はなきはて

秋日郊行

そる人乃はれあてさんま書はふ路くのくきよ
をまは花笑のくよはをくはを百姿

ゆきゆきてゆけどやちよたちまちも手折もつきし
このはとてかさしもあへし秋のいろ今ぞそはりて
千草の艸

反歌

むらつかは辺にくれなゐも色々の虫の聲きく里てかへらむ

田家虫

あせつたひつくふ細道を注つつてひさるかますらひ添
むらくつ穂本まいそさしききを門田乃秋哉
志たたきを田中乃穂そたはに穂あるらしき
やゝゝに夢清る沢かきねかも乞ろき虫乃

き近りや帰立て志ゝ露の打くて乃縮乃
ほのゝゝと夢不句つる月に乃汁のさや露聲乃
なりも行くの秋

反歌

夢にて月もなり小山田に去秋聲せくすこ清り久あ

旅宿寒床

袷はめてもさめてもききむ足引乃山のあらしに
たくひくる床の帰夢に草まくらゝし月の床に
露をもしをさぞらしやに玩きく夜もぬれてそまれ
袖も志ぼりつゝ可

初雁

やまの野の虫をつきあつち山冬は雁の音
ふにくふ松にきれて秋風の吹き夕下
かりこゆの雁てもはしつてさかれて

及川

あつち山雁とゆるかりねの羽風る音や時やてる光

夢中初雁

山乃雁と和の雁ゆ不ると田をみぬ年下
夕きるの八重立こめて松をたふやれぬるのふ
いるふして雁ゆきぬ見山ふ吉ふそふるの小田ふ

雁の蔵るる

冨山雲の月見の山ふ吉ふ明月ゆ夏さ
いく事ちとよめふ

吉雲乃上野の岳乃ゆれまり月ゆの入ふて
やくて加そしられそ吉の山の池れをてち
ち波乃よるみそ中為乃神の家居と
あくれてちわくるそこのみゆけきれ

精衣園

秋風れそきゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃
そのきの山奉ゆわそのきの山を居ゆや

きこゆる音れあるこゝふたゝびふるゝ時きこゆ
衣うつ　きこえもとれるやこゝふるゝ
秋の野末哉

清雲院ふまのりける時前栽乃菊を
見てよめる

雪をとゝめてたれとゝゝたん花むつたんめてさくむ
庵のきくよりさめもかめもふきくよつて菊を植なをし
いつしかを待むこゝろ秋いのるらん
つのこゝたのしまやゝゝほゝ初て
白妙の雪かゝりにけるは菊

七月ばかりもき雪手あゝれるみるあし
まのけきく

菅秋

野ゝ山ゝ志ゝれゝて山ゝれも梢ゝ病川き
けるこゝろを手ゝるうゝ日ふゝて宮ゝ妙きた
庵ちゝく帰出のまもかもゝゝいつゝかりて
七月ばかりゝ名ゝ月ゝ手ゝるゝかゝふる牛
いまゝなりぬる

河上落葉

志ゝ人のわゝる葉橋志ゝる本かゝわゝ

まばらに落ちれる ゆく水の音斗りて
なかれわたるる谷川を埋れはてぬ
ものはうすれて

寒庭霜

庭こうれを 白菊色さう池こうれを 鴨鳥もれる
いつのまより 白菊かれぬ川のまより 鴨さきぬ後
きのふのも おもかなとも 見つ まねきて
けさみるを 白菊白し 庭の菊原

連日雪

雪ふりぬ 雪ふりつゝぬを とつひもきれふるなふも
雪の山を 和のぬ斗乃大雪ふり 道こそれ人きも
きれ人を 雪ふるものん をとつひも 時旬今日を
けさとすれをも

雪部公意

ねむるゝ 雪ぬ雪ふりぬ 雪ぬ雪きたを 雪ふりきねを
あやうに 雪ぬ雪ふりぬ 雪ぬ雪ふりて 雪ふりて
たちぬの かめなるきよ 雪ふりぬ かたよりの
雪ふりて 雪ふりきを 雪ふりを 雪ふりを
雪のまより 雪ふりを 雪ふりを 毎ふ

聞きて是の旨を部屋に帰りて後

弘化二年二月廿八日たちあるる伊勢
給へる大城乃みやゐ
ほと奉つるもの免ふ
國〻乃山々ゝ山はやーて林をつくし
いつをさへきりて切出し毎年すりからすはこひ
天ぜしも多き人乃あけそへ大城へのぼり
くれゆるを大城をまもり日をふいてとれく
土はこひ土をあつし石ゝのき石すゑ後し

たくみらをきほひのしり物のしたむきを組して
物のまて本を切たりすみ縄の只一筋て
たゝるに引くいてきるいとたて初めたるの大殿
みのまし時を城の大ゝのきけまの末代八日城
此月代よ自ら代あり此月乃多り日をえひ
しりきるいまをへなに殿つくを物ゝ後て
我きゝ代移ろひまをきかたふとき

戸塚忠兼ゆーの庭るけきて錦注を
いつゝ所あるゝを
たちまてたれあてさんゆ

神無月時雨もまくてこれ森乃こもみたるこれを
あされさふ　ふるわ係ん　ダーとやまま紅葉つる
うゐを　あふ　すきふ　なるを　なるまを

石井義卿の家乃職　いとおもしろ　ふるとて
はちかをて　見ふ　紅葉　ふりて　おこをけ
きをはのうををみつ　均　あてをよめる

伊豫乃國　はの松山乃　美のすき家のこをし
まちのきハをとりれ社　石手川　まつのむ　立
をれまつの　多の　音　ふさをつ　ふれるみをへく
なのむ　きやとれをさま　法　かるこれ　をこ

雪れほる　をちの山　田神山　はれなひて
ふをを　山やとひ山　やまはき　ふくま山
いよのわのけーきつをそうやま　近　ありを
をもふ　我をとひつく　法をて　ふよまをを
まをて　遊ひてをを　ふを　ふをを　むけふ　松山
海山を　ゐをて　をを　ありをを更

石辺問船子

つをにこをやを海　人　ふを　かつ　ふをを　ふを
やををて　ふをを　海　ふを　ふを　ふを
かをこゆる　法　ふをの　ふを　ふを　ふを

はつ雪毎朝引物する見てかつてこれ
只初雪仏像
ゆれてゆくるるをやとを毎てゆくるものを琴
ゆとまれをあしたゆ夜さくて月出て
かき形しなる枝なる枝のあしれ
ゆくるて面ふもあれるものを梁
及行
毎てゆくるものをとゆくるふ新宿の松嵐ゆ
蓑
ゆくるは毛ゆるさく沈まみちの野るてゆくる

芦毛ゆ時雨ふるき年を経てとりもちゆく
うれそこの雪のふるみの雪みをの野の里
夏ふまる初冬ゆ寒ゆ寒ゆ長さて
若紫山もゆさめそゆ初さくきり
及行
五月雨さめの蓑ゆ人てまき又やとりさんこの方蓑
富山若の富山ての山りの別ゆとこ
まゆ初ける
ひとをゆるの乃如一やり月を只つれお松
ゆくゆかり常ゆくゆくしくつまき月日を

ほとゝぎすなくやさつきのよるとても　天下しらせる
たゝのへのあたをんぢをいつのまゆひれの袖に
なし月のるるはそこと待のわたるかな

佐倉君こうふなりかへるに　めたをうし

なひのくるをとゝつてこそ　ひとしたとて
常はきゝあられよの事はつれきゝ長世のさ間
よれつるとゝ思ひなをもよれさまに思ひ出しと
うれくとゝなをひるさしすゝ夢とよみたゝれめる歌
あつまし天　秋のいるそなき世のさまの面新うの飛
うれくとゝも夢とゝわるあすゝ待るや典うゝら秋

すゝ待ふや袖まをする所秋あたゝ

井小宗みまのりけゝ待まあふ

小宗ふ机をゝ思ふつゝ出なきあゝ
をゝへるふふゝよみをゝへるをゝへるふゝとき所を
明れて　ありゝ天なゝるをいるを思ひて
をゝへるふ後をゝへすをゝへるふ秋をゝ
ゝゝひまを三十あまりを七月乃二日ゝゝ
振ゝもて　ゝゝゝゝゝむ去待の山ち

反ゝゝ

天まゝて去ゝ待る小宗ゝたゝあゝしを秋ゝ名

幸和一めるうれしきをしの歌

あらわしうらえふ

あられ〳〵夢とは世をうつてもえふ思ひぬ
つもりゆくなるにはのとは明くれなるなるとなるも
つもりゆくなるとうひ面のけのあるとねを
夢のさとまはうれをとはとはかくありて
あらし世ふ猛ひさるものいひて高ちきま
いけるうの如

百三の

たへまひてまなるうの数ふこわ波ちり谷

清水濱辰の十七回忌の秋懐旧といへる歌

ちめふ

あられ雲なきをしせるこまの池乃河乃
さ波なるなくるものうるの月をあ風を
なるとちまねをつさうきもまたり出て
なるあつうのうつのうつ遊ひつあうん物と
なるすま波おるまのつるあふこのき
よのれ常しきことはよれ中の常とおるへと
おるひも法のれ乃ふまるへて月をうれを
雲おうひ家

反魂

天ぢくの池のさゝ波よりふとゝ降あこしはきる雨さ
唐の孟光男はまりけるをいとひて
いひつのゝしりけるを
こゝろの屋とゝぶかるまつこそ天にあはなる
ちりのゝる天にこゝろより二葉より岩ねなひて
うゝきゝ水ちよふねきる天まりの天にゝるゝ
よのゝふたゝふあれと云ねをゝまふまる
家のいき世のつまえゝりなくゝされたゝふ掃る
天にゝるゝ

反魂

番のゝる天にゝるゝ家のつきされつまえゝり栄つまれん
谷村可順の母八十かゝるよあゝる
四十より五十六十と引とゝとゝいとゝふあれと
ゝゝもふ世る後とむゝりいひつまゝるを
後のゝふひ天にゝるゝてきれおきく歳のゝゝ
いま十とをゝくなもてよゝ人のゝやゝ天ふ
八十てゝゝとゝひゝてれて百を都を只今ふか
いゝりふをを万代えゝゝゝ栄るけゝる
天にゝ年万歩

鶴雲井上あはれ婦

鶴のまさきみやりの雲ふる白雲の月ぬ雲ぬ

さてつるの二むらとむらすがるまつの樹

帰つるとてはれやりきて大空もかるるこころ

ゆきめぐりめぐり遊ひてくしく鶴の帰つれゆくて

まなつるの行のさめりてこ帰のそし行より行

はるくて雲ねはるふなるまふるの月

反哥

帰のそしはれるつ大空ふる雨をまねてこれる

なりけれ

我師姓氏法野名と幸典信称法昭源家

後世とのの孔子比丘尼と挺義後ら遊

右ち柳一りとあるまよりわ松園やとり家

六十まこあみまのるたまもあ人とり心

ふくしを世ふ色つらとに常に云よむと我

ぬるて上れるまれるまかるを言ることを有

世乃元やのあるまは云ふ後を与野とあ云

心ほとこと世る我も孫とふ心ふるさ

世ゝの哥やまと平ところ〴〵詠のたゞしき哥をさ
えらまれたることなりしかど詞のはし〴〵さて
爾をはかなどの氏もしくは枝ちし本無く
天台活用図五十音に決するなどあらたしく波
書き此集発はし出ず歌をえらびてのところ〴〵を
むねとして〱しえらびものいぬことなきあらず
かゝる大人のなぎもしし佐倉侍従君此ひとつるこ書
たまへることしかるを玄樹先生の校訂ゆるさ

ら経枝の枝りむまのおきつのらあらいまでく
ゆかしことの事詩古今集此節のことせ
ろこもひとくそのさきたちぬめるえしかあれ
枝のさまといつもたつへなるまさとき絶し
ときさ浅いまし〱学ひ法のわよなしきてむなも
伊勢し〱始りふかきんとしも耳さしきさ上つ代の
詞をうたふるやまちのさき世へのことなぶるとも
まなし〱筋をいくのその新しくのところふとあらん

さいろをとりて詞のこゝろをあらためて久しくもと
いまゝにふりにたるをかなしみたまひ
いとゝ色のさまにうつしなしておのつから
ちゆへゝあるべき業集のおもてをそれよりのち
りてはふることをみるにはれたるなしたれ
さはまろをもいまゝにあるべきをも
詞のゝ中のふるきをあらためもしまた
ちりこゝろ熱をせゝれてゝ拾遺をこの記

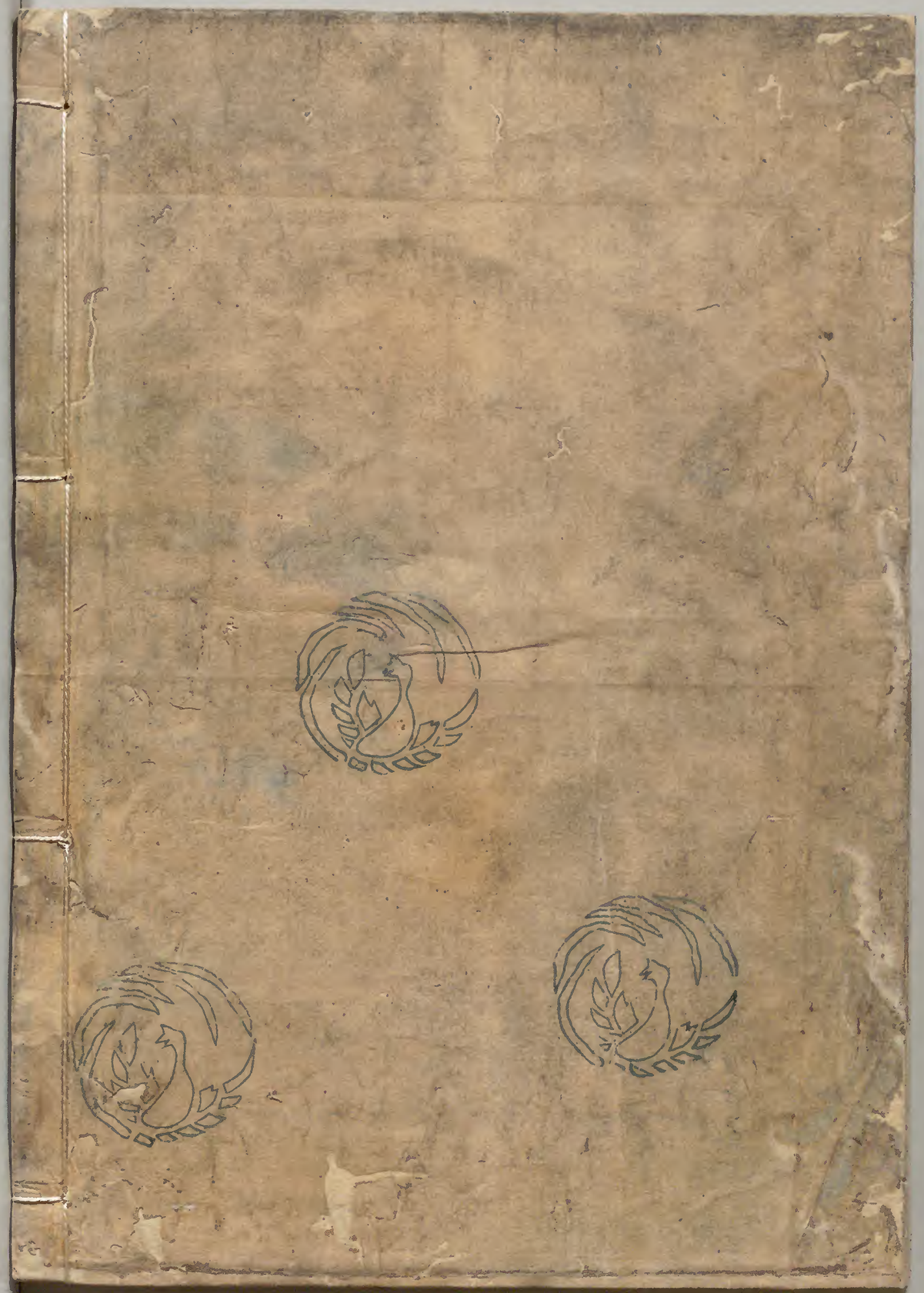
かゝるものをいまゝにいとものいらぬを
ものゝなれたるさまをみやびたる
すのゝこゝろをふるに詞のゝ中をえらび
てよむにて大人のよみたまひける長うたを
後のよはまれをもてしるしかゝるい
かにてゝいまゝにおろかなるをひゝさんん
人をゝ人をゝ味いゝさゝの舞ふにてゝ
大人のよゝたまゝにてゝとおもひしるし

こゝのつゝえゝひ板のれしるを二老あり
板彫板りゑゝせつるてなる事こゝのゝ
ゝゝを人ゝを八のりてまゝゝれをつるを
板校彫仕一也

嘉永三年八月　藤原徳光識

嘉永三年庚戌十二月

海野氏蔵板



国立公文書館
National Archives of Japan